

花

～もののあはれ～

上期

企画展

「花～もののあはれ～」

「しき嶋のやまごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」

松阪の偉人、本居宣長の御歌。

花の美しさに触れて魂が震える感動を、古来より私たち日本人は様々な形で表現してきました。

桜を代表として、命ある「花」の自然美から心に宿る色々な想いは、言葉となり、絵となり、表現され、忙しく過ぎ行く日々の生活に潤いある豊かさを与えてくれています。

展覧会テーマでもある「もののあはれ」を提唱し、花とくに桜をこよなく愛した本居宣長の地元松阪の地でそれぞれの作家が表現した「花」の世界をどうかお楽しみください。

ぜひご高覧いただけましたら幸いです。

ギャラリーMOS 松本恵介

足立徹
安藤由香
高田久恵
田中香里
棚町宜弘
長野聖司
橋本絵里奈
福永明子
藤木貴子
宮田佳子

2022年

4月9日(土)～17日(日)

10:00～18:00 ※最終日16:00まで

※木曜休廊

長野聖司「蓮」

Exhibition



花

～もののあはれ～

上期

2022年4月9日(土)～17日(日)

10:00～18:00 ※最終日16:00まで

※木曜休廊

足立徹「ヒルガオ」



高田久恵「愛娘」



田中香里「ひとつたば異世界」



安藤由香
「葉桜」



藤木貴子
「一輪の花」



棚町宜弘「お花見電車」



福永明子「clover」



宮田佳子
「染做す」



橋本絵里奈「uchuu.」

出品作家／足立徹、安藤由香、高田久恵、田中香里、棚町宜弘、長野聖司、橋本絵里奈、福永明子、藤木貴子、宮田佳子
敬称略・50音順



「本居宣長四十四歳自画像」
(本居宣長記念館収蔵作品)

物の哀れ (読み)ものあわれ

もの【物】の哀(あわれ)

【一】物事にふれてひき起こされる感動。多くは「おかし」「おもしろし」などの知的興味やほなやかさの感覚とは違った、しめやかな感情・情緒についていう。

①人の心を、同情をもって十分に理解できること。人情の機微のわかること。また、その人情、愛情など。

※土左(935頃)承平四年一二月二七日「梅取、ものあはれもしらで(略)はやく往なんとて」

②物事にふれて起こる、しみじみとした回顧の感慨。

※宇津保(970-999頃)内侍督「よろづ物のあはれなむ思ひいでられ、昔の人の声などもほえ」

③物事や季節などによってよび起こされる、しみじみとした情趣。折からの感興。

※拾遺(1005-07頃か)雑下・五一「春はただ花のひとつへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる(よみ人しらず)」

④何かに深く感動することのできる感じやすい心。情趣や風流を理解し感じることのできる情緒的教養。

※枕(10C終)一三五「清範、講師にて、説くことはたいと悲しければ、ことにものあはれ深かるまじき若き人々、みな泣くめり」

⑤悲哀や同情を感じさせるような気の毒なさ。

※浮世草子・好色一代男(1682)四「物(モノ)のあはれをとどめしは、去大名の、北の御方に召つかはれて、日のめもついに、見給はぬ女郎達や、おはした也」

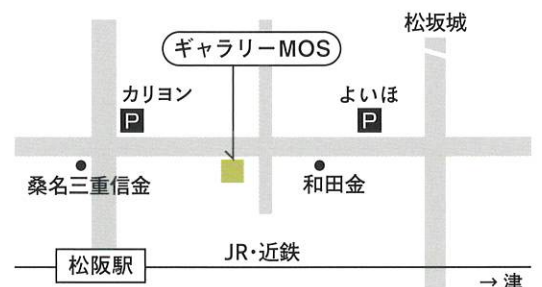
【二】本居宣長が提唱した、平安時代の文芸の美的理念。外界である「もの」と、感情を形成する「あわれ」との一致する所に生ずる調和した情趣の世界を理念化したもの。自然・人生の諸相にふれてひき出される優美・繊細・哀愁の理念。その最高の達成が「源氏物語」であると考えた。

※紫文要領(1763)上「これすなほち物語は、物の哀をかきしるしてよむ人に物の哀をしらすといふ物也」

【補注】「あはれ」は、古くは感動詞として、喜・怒・哀・楽のすべてにわたって発せられる言葉だったが、「もの」がつくと、「ものあはれ」も「ものあはれ」も、「哀」に限定されるようになる。

出典 精選版 日本国語大辞典精選版 日本国語大辞典について

オンラインでの展示、販売も同時開催します。
こちらからご覧ください。



■松阪駅西口から徒歩7分

松本紙店

〒515-0083 三重県松阪市中町1870 松本紙店2階

TEL:0598-21-0603



www.matsumotokamiten.com

後援：松阪市